

第8回 車座・交流会 in 広野町

JKSK「結結プロジェクト」は、これまでに被災地で車座・交流会を7回にわたって開催し、東京新聞での「東北復興日記」の連載など、20におよぶ個別プロジェクトへの協力・応援・主催を続けている。なかでも、2013年からは「ふくしまオーガニックコットン」の応援として独自にボランティアバスを始め、広野町の綿栽培のサポートをしている。

今年も「広野町応援プロジェクト」の一環として3回のボランティアバスの運行を実施した。今回の車座・交流会では広野町の自然に触れ、魅力を知り、そして地元の皆さんと交流して未来を語り合う2日間となった。初の民泊も行い、深い交流を行うことができた。

【日 時】 2015年07月10日～11日

【場 所】 福島県広野町

【協 力】 広野サステナブルコミュニティ推進協議会、いわきおてんとSUN企業組合

【参加者】 広野町を中心に東北で復興に取り組む現地リーダー 32人、首都圏からの参加者・専門家 21人

【初 日】

7時	新宿発 貸し切りバスにて広野町へ
11時	広野町中央体育館会議室にて昼食& オリエンテーション、町の復興概要説明
12時	被災地訪問 広野町～J ヴィレッジ見学・講話： 原発廃炉作業の最前線・広野町長歓迎挨拶 ～大熊町民立ち寄り所 じじい部隊による中間貯蔵施設ジオラマ見学 ～一般道を南下しながら視察（夜の森・富岡駅前・がれきの焼却処分施設・楡葉町）～広野町
17時	アルパインローズにて歓迎交流会
21時	民泊（広野町の参加者宅で宿泊）

午前7時過ぎに新宿駅西口を出発。予定よりも大幅に早い10時半には広野町に到着した。広野町総合体育館会議室では、地元住民で「広野わいわいプロジェクト」を推進する「広野町サステナブルコミュニティ推進協議会」の代表 根本賢仁さんが迎えてくれた。根本さんによると、一時は全町民に対して避難指示が出て、住民同士のコミュニティが失われた。2011年9月に解除されたものの、現在でも震災前の5割弱の約2,500人しか戻ってきていない。まだ半数がいわき市など他地域に避難したままである。そして、広野町には住民の人数よりも多い3,000人ほどの作業員が福島第一原子力発電所の収束作業や除染のために居住していると語った。「みなさんに現地をつぶさに見ていただき、私たちが気づかないことを率直に言っていただければ、それを参考にして前を向いて色々な取り組みができると思います」と話し、今回の車座・交流会に期待を込めた。続いて「いわきおてんとSUN企業組合」代表の吉田恵美子さんは、オーガニックコットン栽培の取り組みを広野町の農地で始めた経緯を説明。「色々なご縁が広野町の将来を考えるきっかけになりました。広野町は双葉郡の玄関口ですから、広野町が元気にならないと双葉郡全体が元気になりません」と、力を込めた。

また、広野町総務課長大和田さんによる町の復興状況の説明では、インフラや雇用の不足が帰還に支障を来していると指摘した上で、町役場前に今秋をめぐり1,000平米の商業施設ができることや、広野駅の東側に来年3月に6階建てのテナントビルが完成することを紹介。「目に見えて復興していることを広野町民や周辺の人に見ていただくことが町民の帰還につながると思っています」と話した。一方で、震災前は2、3世代が同居していた家庭が、狭い仮設住宅に住むことで、家族が分裂したことも帰還が進まない原因だと指摘。「嫁姑問題がなくなり、都市化、核家族化の波が一挙に訪れた」との見方を示した。



仮設住宅に90代のお年寄りが1人で住んでいるケースが何件もあることや、全広野町民が帰還した場合の3,000人の作業員分も合わせて飲料水など水源の新たな確保が必要になってきたなど、さまざまな課題を話した。このような現状を知ったうえで、参加者たちはバスに乗って近隣の町へ。まずは、広野町と檜葉町に立地する「Jヴィレッジ」。震災前は日本初のサッカーのナショナルトレーニングセンターだった施設だが、今では福島第一原発の収束作業のための作業員の「前線基地」となっている。青々とした芝生だったピッチは、11面中9面が計2千台の駐車場に。周辺を囲むように立つナイター用のライトだけが、かつてはピッチだったことを語っている。

東京電力・福島復興本社の社長 石崎芳行さんが施設や復興の現状を説明した。毎日約7千人の作業員が集まり、大型バスに乗ってピストン輸送で20キロ先の第一原発に向かっている。作業員の半数は福島県民である。石崎さんは「廃炉にあたっては皆様にご迷惑をおかけして申し訳ないと思うとともに、作業従事者を地域に受け入れてくださっている住民の皆さまに感謝している。収束作業に従事する方の多くが福島県の皆様で、『東電のことを許さないけれど、東電と一緒に廃炉作業をすることでふるさとを取り戻す』と一定のご理解の元、ご尽力いただいています。私たちは逃げるつもりはありませんし、これからも精一杯取り組んでまいります。フェイスブックもしています。ぜひご覧ください」と。Jヴィレッジでは遠藤智広野町長も一行を歓迎。「民泊などを通して、首都圏の皆様の新しい価値観に基づき、一緒にまちづくりに取り組んでまいりたい」と挨拶された。

バスで檜葉町に入ると、道路沿いに草が茂っている。地元の方に教えられて、それが初めて水田であったことを知った。耕作されず、青々とした野原のように姿を変えた水田には、おびただしい数の黒いフレコンバッグが積み重なっていた。その中身は、いずれも除染で削った土や刈った草である。数千個、数万個もあろうか。富岡町に入ると、広野町では0.2マイクロシーベルトだった高速道路沿いの線量計が0.7シーベルトに増え、ところによっては2.1マイクロシーベルトと表示されていた。

大熊町では元町役場職員6人で結成した「じじい部隊」のお話をお聞いた。土日も休みなく交代制で避難先の郡山やいわきから「町役場現地連絡事務所」であるプレハブ事務所に通い、町内パトロールや実験圃場の管理、坂下ダム管理などを行っている。岡田範常さんと杉内憲成さんがジオラマを説明。大熊町では全町民約1万1,000人が県内外に避難しているが、国は平成29年3月末までに居住や立入りなどの制限を解除する方針である。しかし、上下水道や除染などのインフラが整っていないなど課題は山積み。岡田さんは「私たちは先祖から受け継いできたこのふるさとを、数十年かかろうと戻り、子孫に継承していきたいと思っています。この実態を見ないでマスコミの報道だけが広まってしまっているが、ありのままの姿を見ていただきたい」と訴えた。





富岡町に戻り、常磐線の「夜の森」駅を見学。電車が走らなくなった線路には、線路を覆い尽くすような勢いで、草が生い茂っていた。有名だった桜並木では、道路の片側は「居住制限区域」、反対側は「帰還困難区域」で立入禁止と分断されている。電光掲示板の線量計の表示は3.01マイクロシーベルト。2011年3月11日に屋根から落ちた瓦、干したままの洗濯物。震災当時のまま時間が止まっていた。

その後、楢葉町の天神岬へ。展望台にのぼって海を眺めると、広野火力発電所が見える。東京に電力を送っている。また、海岸線に津波に流されずに耐え残った数本のタブの木が立っていた。地元の方によると、タブやヤブツバキ、クロマツなどは津波でも比較的に残ったため、来年3月に広野町の防災緑地で植樹する際には、タブ、クロマツを植樹する計画だそうだ。



夕方から、広野町・ニツ沼総合公園内のレストラン「アルパインローズ」にて、広野町内外からの復興・地域づくり活動の報告会。広野町からは、町に賑わいを取り戻すパークフェス、防災緑地の植樹などを通して交流を生み出し、みかんやオリーブを商品化しなりわいを生み出す「広野わいわいプロジェクト」。地域イベントなどを通して街を盛り上げようとしている「がんばっ会」、オリーブを広野のシンボルとして農業と自然環境の再生などを図る「ひろのオリーブ村」、桜の植樹と維持管理をしている「さくらプロジェクト」、田んぼにアヒルを放してお米の減農薬栽培に取り組んでいる「新妻有機農園」などが活動報告。いわき市からは、オーガニックコットンの栽培やスタディツアー、コミュニティ電力などに取り組んでいる「いわきおてんとSUN企業組合」事務局長 島村守彦さんが、南相馬から被災女性の交流や子どもの学習支援などを行っている「ベテランママの会」代表 番場さち子さんが取り組みを報告した。



歓迎交流会で食事を楽しんだ後、遠藤町長をはじめ町民9軒のお宅に2～4人ずつ泊めていただき、それぞれ「民泊(ホームステイ)」を体験しました。温かくもてなしていただき、会話やおいしい朝食をいただきながら、深い交流が実現したプログラムとなった。



【2日目】

翌日は、桜並木やオーガニックコットン栽培地、来年3月に植樹予定の防災緑地、あひる農園、二ツ沼総合公園内のオリーブ栽培地などを見学。昼食には公園内でお弁当を食べ、またいわきおてんとSUNによるオーガニックコットン製品の販売会で買い物をした。

8:00	民泊先にて朝食
8:30	広野町の豊かさ、地域資源を知る： さくらプロジェクト作業現場～ふくしまオーガニック コットン栽培地～防災緑地造成地～稲作地域 あいがも 農家～二ツ沼総合公園オリーブ栽培～みかんの丘
12:00	二ツ沼総合公園内にて昼食 ふくしまオーガニックコットン製品販売会
13:00	車座・交流会ワークショップ
16:00	広野町発
20:00	新宿着

午後は「車座・交流会ワークショップ」を広野町総合体育館の会議室で開催。

3者によるプレゼンテーション後、「防災緑地での森づくり」「イベントを通じたにぎわいづくり・安心安全なまちづくり」「特産品を活用した仕事づくり」とテーマに、ワールドカフェ方式で意見を出し合った。交流会の最後に、大和田理事長は「JKSKは、2011年5月より『結結プロジェクト』を開始し、これまで8回の車座・交流会を実施してきました。その過程でいわきの吉田恵美子さんとの出会い、そして広野町の綿畑を通じて根本賢仁さんや門馬まりえさんとの出会いがありました。今年はJKSK ボランティアバスPやCSV マッチング見学会から誕生した『広野わいわいプロジェクト』に協力し、広野町の復興を応援し、持続可能なコミュニティの再生に貢献していきたいと思います」と抱負を語った。

広野町サステナブルコミュニティ推進協議会の根本さんは、「みんなが広野町に帰還して街を元気にしたい。東京からアイデアをもらって一つ一つ実践して、この輪が広がっていったらう

れしい」と話した。車座・交流会に参加した地元の女性たちからも「何かできるような気がしてきた」「交流サロンのようなカフェを実現したい」「ブルーベリーを商品化したい」などの声が口々に聞かれた。首都圏からの参加者、地元参加者それぞれ別れを惜しみながら、9月のボランティアバスツアーでの再訪を約束してバスに乗り込んだ。

帰路のバス内で、参加者からは「民泊で地元の方の不満や本音を聞くことができたので、その思いを吸収したうえで、ワークショップで意見を言うことができた」「ニュースで見た以上の現状を知ることができた」「アイデアを出しながら交流していくことが次の希望につながっていくと感じた」などの感想が出された。

「道の駅 よつくら」で地元農産物や加工品などお土産を購入し、新宿駅西口には20時過ぎに到着。広野・富岡・大熊町の現実を知るとともに、民泊で交流や車座を通じ、いつしか参加者たちは広野町の町民により寄り添い町の将来に思いをはせるようになっていた。

